

あいらの歴史と物語

歩き・み・ふれる歴史の道「帖佐麓をめぐる」

始良市教育委員会社会教育課文化財係 池田 亘



島津義弘居館跡(帖佐稲荷神社)境内



島津義弘居館跡(帖佐稲荷神社)

歴史民俗資料館特別展「薩摩の武士が生きた町(麓)」の開催にあわせて、本年度は11月21日(土)に帖佐麓の史跡を巡りました。

麓とは、外城制度という薩摩藩独特の制度により形成された集落です。防御に適した建物や石垣の配置を持ち、城のように敵に備える構造を持っていました。ここでは武士たちが武芸の鍛錬を行いながら農耕に従事し、生活を営んでいました。

当日は役所の役割を持っていた地頭仮屋(現帖佐小学校)を起点として、納屋町・米山薬師・西南戦争記念碑・花園寺跡・島津義弘居館跡・宇都窯跡・荒神の順に史跡を巡り、説明しました。

帖佐麓は主に納屋町と武家屋敷、島津義弘居館跡で構成されていて、現代の町並みにも当時の面影が残っています。納屋町では、商家が立ち並んでいた町割や納屋町御蔵・納屋町船について説明を行った後、島津義弘居館跡へ向かいました。途中には、登城路も兼ねた仮屋馬場や敵が城内に直進できないようにする枳形(出入口口に方形の空間を設けた防御施設)、堀として使用するために流路変更されたと考えられる門前川など防御機能がみられました。

現在、始良市では日本遺産として蒲生麓が認定されていますが、帖佐麓もまた地域に残る重要な遺産の一つであると改めて認識しながら歩いた一日でした。



島津義弘居館の大手門跡

300余年の伝統と技～龍門司焼

竹之内茂

龍門司焼は、慶長3年(1598)「慶長の役」の終結の際、薩摩に來た朝鮮人陶工の子孫によって始められた窯です。

元禄元年(1688)、山元碗右衛門が小山田で良質な原料を発見し、享保2年(1717)茶碗屋に登窯(龍門司焼古窯)を築いたのが龍門司焼の始まりと伝えられています。



この窯は連房式登窯と呼ばれ、多くの陶工たちによって使い勝手が良く生活に密着した黒薩

摩を代表する焼き物が作られました。

240年余り焼き続けたこの窯は、県の文化財に指定されています。その後、昭和30年に県道沿いの現在地に新窯を築き、龍門司焼企業組合が江戸時代からの伝統技法を引き継いでいます。

龍門司焼は昔のまま、地元の山で採取した土と釉薬の原料を使い、登り窯で大量の檜の木を燃やして高温で焼成しています。多彩な釉薬と技法があり、黒釉に青流し・玉流し、三彩・飴釉・蛇蝎釉・鮫肌釉がみられ、湯呑みや皿などの日用陶器、茶道具など多種多様な器を作っています。

小山田の窯場では、力強く素朴ながらも優美な龍門司焼を陶工たちが製作する様子を見学できます。



蒲生女性の会

島津義弘ゆかりの史跡を訪ねて

吉田茂子

令和2年12月3日蒲生女性の会(26名)が義弘ゆかりの史跡を探訪されました。

加治木郷土館ではスタッフから展示品の説明を受け、その後隣接する加治木島津屋形跡を経由し、一路精矛神社へ向かいました。

義弘(神号「精矛くわしほこいずたけのみこと建雄命まつ」)を祀るこの神社はもと加治木高校の隣にありましたが、大正7年(1918)「義弘公没後300年祭」の時、現在の地に移転しました。

一行が到着した時間が昼時でもあり、小春日和の陽ざしの下、広い境内の中で思い思いに弁当を楽しんでおられました。

その後、神社の由来や神社奥にある鳳山和尚が朝鮮から持ち帰った石臼・手洗鉢、松岳和尚の經典誦誦塔の説明をしました。

境内を巡っていると筆で描いたような十字の旗幟が高く翻っているのを見て、はたして何を意味する文字なのか話題になりました。

記念撮影後、新しく整備された景勝地の黒川岬展望公園に行き錦江湾に浮かぶ桜島を眺め感嘆されていました。

最後に島津義弘居館跡(帖佐稻荷神社)に行き大手門跡・花園寺跡を見学し、史跡めぐりは終了しましたが、皆さんの笑顔がとても素敵でした。

*島津氏の家紋は鎌倉から戦国時代までは十文字を使用していましたが、江戸時代になると〇に轡くつわ十字を使うようになりました。



令和2年度歴史ボランティアガイド 養成講座巡見について

始良市歴史民俗資料館主催の令和2年度同ガイド養成講座は募集者2名の参加により9月から6回の講義を行い、11月から2月までは市内の主な文化財を巡る、現地研修を行ってきました。

この講座には、始良歴史ボランティア協会も参加・協力し、実地研修である巡見にも協会員が自らの自己研鑽を兼ねて参加しました。

巡見は、ボランティア協会の企画部・研修部・広報部の協会員が地区毎に分担して参画しましたので、その状況を報告します。

加治木地区巡見 11月28日実施

広報部 新園淳一郎

晩秋の暖かな陽気の中で加治木地区の主な文化財を受講生2名含め5名で巡見を実施しました。巡見に当たっては、予め文化財とコースを計画し、決められ時間内に終了できるか下見の上、実施しました。受講生はもとより参加者全員がガイドとなって説明役になるため説明時間・内容・話し方など、うっかりミスも許されない緊張感が漂っていました。



特に加治木地区では、島津義弘に関わる加治木島津屋形跡や精矛神社などの島津氏関連や鋳物業を営んだ森山家の幕末関連といった興味をそそる文化財が多く残っています。

重富・山田地区巡見 1月16日実施

研修部 梅田眞次

巡見は受講生を含め8名で実施しました。受講生もこれまでの研修成果の発表の場として史跡ガイド役を務めました。

当日は、重富から山田地区まで巡見するため

時間の都合上、白銀坂を登れず残念なスタートとなりました。岩剣神社や水口ゆきえの顕彰碑では案内板を中心に説明し、山田凱旋門や招魂石では説明者が案内板の外、自作のガイド原稿を用意するなど工夫した説明もありました。

また、黒島神社では、住吉池にまつわる黒島どんと老神^{おいがみ}どんの池争いの伝説を交えながら説明する場面もありました。

山田地区には今回巡見した以外に多くの文化財があります。コロナ禍、注意しながらの散策も楽しいのではないのでしょうか。

帖佐地区巡見 12月12日実施

企画部 松下澄行

歴史ボランティア研修生と私たち協会員で帖佐地区の巡見を実施しました。帖佐は昔、地頭仮屋を中心として郷士が住み、東側には商人のための納屋町があり、又隣接する半浦町は海上物流の起点として栄えていました。帖佐郷の地頭の職務は、①土地の管理②年貢徴収③警察及び裁判などです。

『始良町郷土誌』によると帖佐の地頭は、室町時代大永6年(1526)島津昌久から始まり江戸時代後期まで続きました。その中には、島津久賀^{ひさよし}や島津義弘の家老であった上井里兼の名もあります。里兼の任期は寛文8年(1668)までとあり、墓は市内中津野自治会の亀澤家私有地にあります。

地頭は外城^{とじょう}制度初めのころは任地に居住していましたが、寛永年間(1624~1645)から



は鹿児島居住となり、郷内は所三役(郷士^{とじょう}・年寄^{としより}・組頭^{くみがしら}・横目^{よこめ})に任されていました。なお、地頭の禄高は50石でした。

十一面観音堂跡の石碑について

竹之下洲一

昨年10月、中津野の崎園原にあった十一面観音堂跡の石碑が、加治木隈媛神社の境内に遷されました。この石碑の由来について記してみます。



島津義弘が飯野城にいた永禄12年(1569)夫人隈姫の実家である人吉相良家が島津氏に反旗を翻したため、隈姫は離縁となりました。隈姫は悲しみのあまり御化粧地であった山

田郷辺川に移り、まもなく自害してしまいました。

その後島津家では祟りがあったため、義弘は隈姫に「宝現大明神」の神号を申し受け、飯野に保寿院を建立し供養しました。

文禄4年(1595)、義弘が飯野から栗野を経て帖佐に移ると、山田郷寺師村に御堂を建て、十一面観音像を安置して祀り、隈姫の御霊を弔いました。この御堂は、慶長11年(1606)義弘が平松城に居館を移すまでの約11年間ここに置かれていたといわれています。その後御堂は朽ち果て、中津野の崎園原に高さ1.2mの石碑が建てられました。今では碑面は風化し刻字は読みとれません。

石碑のあった観音堂跡地周辺の開発に伴い、隈姫を御祭神として祀る隈媛神社の境内に遷されたのです。

ご 案 内

1. 企画展

「水神-碑に刻まれた先人の記録-」の開催
令和3年3月2日(火)から
令和3年4月29日(木)まで

2. 史跡めぐり「漆の麓をあるく」の開催

令和3年27日(土)

詳しくはAIRAview2月15日を参照

興味尽きない新聞記事

玉利良一

『始良市誌 別巻3資料 編新聞記事(明治・大正編)』には、始良市に関する新聞記事が年代順に、明治時代が882件、大正時代が3,250件掲載されています。

今般、自分たちが興味を持ったテーマがどのように取り上げられているか調査しました。関連する記事量が多く、想像以上に手間暇のかかる作業でした。

例えば、当時の土地の値段や汽車賃が、現在ではどのくらいになるのか、登場人物はどのような人物だったのかに興味を持ち、関連する記事や書籍を探索したりしました。その広がりや、予想をはるか上回り、探求欲をおおいに刺激されました。

現在では昭和編も上梓され、活用の範囲はさらに拡大しています。皆様方の歴史研究に多くのヒントが得られるものと確信します。



編集後記

いよいよ新型コロナウイルスのワクチン接種の実施が始まりました。しかし、全国民に行き渡るまでは時間がかかります。しばらくは耐えなければなりません。

ガイド活動も自粛のため大幅縮小となり、広報誌の企画も工夫が必要となっています。新型コロナウイルスの早期終息を期待します。